

平成 27 年度 S G H 実践報告書



群馬県立中央中等教育学校

平成27年度SGH実践報告

群馬県立中央中等教育学校SGH推進部

本校は、昭和38年に開校した県立中央高等学校を前身とし、平成16年に全国5番目となる公立の中等教育学校（各学年の定員120名、4クラス）として開校した。

創立時から「学校の英語化」を推進し、平成16年度と平成19年度から平成21年度はSELHiに指定され、英語コミュニケーション能力を向上させる取組を行ってきた。

平成26年からは、SGHとして「地球市民としての日本人」の育成を土台としたグローバル・リーダー育成を目指している。

目指す生徒像

①World Citizen（地球市民としての日本人）

- ・ 国際的な視野をもち、世界の人々から信頼される生徒
- ・ 進んで国際社会に参加し、協力することができる能力、態度を身に付けた生徒
- ・ 英語コミュニケーション能力を備えた生徒

②グローバルな社会課題を発見し、解決に向けて主体的に活動できる生徒

③リーダーとしての資質能力を備えた生徒

SGHで目指すグローバル・リーダー像

高い英語運用能力と世界の多文化の現状に親和的に対応できる感覚を身につけ、地球市民としての意識をもち、発見した課題の解決に際して明確なコンセプトやビジョンを示せる人材

研究開発の概要

目指す生徒像の実現に向けて、「①学校設定教科」「②総合的な学習の時間」「③学校行事」「④課外活動」を中心に、研究開発に取り組んでいる。

課題研究の中心は、①学校設定教科「World Citizen 科」における「多文化理解やグローバルな社会課題・ビジネス課題」をテーマにしたグループ研究（4人組）と、②総合的な学習の時間「地球市民育成プロジェクト」における、個々の興味・関心を追究し、「自己の在り方生き方」を考える個人研究である。また、それらを補完する取り組みとして、「SG学校行事」と「明石プロジェクト」（課外活動）を位置付けている。

World Citizen 科

①Multi Cultures I（1学年 35時間）

地域に在住の外国出身者や連携大学の留学生を講師として、国や文化についての講義や交流を通して多文化の現状を学習するとともに、多文化理解をテーマにグループ研究を行った。今年度は、スリランカ、アメリカ、モンゴル、香港、中国、ドイツ、シリアの出身の方を講師として招聘した。



②Multi Cultures II（2学年 35時間）

群馬県の外国人職員やALT、連携大学の留学生らとの英語によるコミュニケーションを体験するとともに、多文化理解をテーマにグループ研究を行った。今年度は、アメリカ、カナダ、イギリス、アイルランド、オーストラリア、南アフリカ出身の方との「Lunch Discussion」や「Speed Interview」と電子メールやスカイプなどICT機器を活用して、研究に関する情報収集（質問）や発表を行った。



③Global Studies I（3 学年 35 時間）

連携大学の教授等によるワークショップ等を通して国際的諸問題を学び、その中から課題を設定し、グループ研究を行った。今年度は国連ミレニアム開発目標の8つのゴールをテーマに研究を行った。

- ゴール 1：極度の貧困と飢餓の撲滅
～日本の農業技術の移転による経済発展と栄養改善～
- ゴール 2：初等教育の完全普及の達成
～初等教育修了率増加にむけた学校の価値・魅力～
- ゴール 3：ジェンダー平等推進と女性の地位向上
～日本の現状を他国の例から分析し、新制度を提案する～
- ゴール 4：乳幼児死亡率の削減
～成功事例から考える貧困国における教育・健康診断の普及～
- ゴール 5：妊産婦の健康の改善
～途上国へ助産婦の育成・派遣など先進国ができる医療支援～
- ゴール 6：HIV／エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延の防止
～ワクチン未開発の感染症の感染経路を遮断する～
- ゴール 7：環境の持続可能性確保
～発展途上国の下水道と衛生環境の実情、改善策～
- ゴール 8：開発のためのグローバルなパートナーシップの推進
～途上国のユースへの技術協力を通して国同士のつながりを深める～



④Global Studies II（4 学年 1 単位）

群馬県内のグローバル企業等からの講師による講義を通して、グローバルなビジネス課題を8つ設定し、グループ研究を行った。今年度は、県国際戦略課、老舗企業、製造業、観光業の方の講義を実施した。また、年度末にはグローバル企業訪問を実施し、各講師に学習成果の発表を行うとともに指導助言をいただいた。

- 1) 外国人観光客の群馬県への招致の方法
- 2) 群馬県の特産品がもたらす経済効果とその戦略
- 3) メディア利用における群馬県の魅力発信の方法
- 4) 群馬県の新しいブランド化
- 5) 群馬県から発信する新しい環境ビジネス
- 6) 群馬県からアジアへの進出戦略
- 7) グローバル・リーダーを群馬県から輩出する（ための教育） グローバル企業訪問
- 8) 観光業における言語コミュニケーションのあり方



⑤Global Studies III（5 学年 1 単位）

国際事情、世界の宗教、国連活動、国際経済、グローバルビジネス、ESD、環境問題、比較文化等の中から課題を設定し、グループ研究を行う。今年度は、海外修学旅行先のシンガポールでのフィールドワーク等を実施した。年度末には、高校生約800名が参加した群馬県の合同成果発表会において、8つのグループが発表し、県内高校生等と意見交換できた。

⑥Contemporary Studies（6 学年 1 単位）

設定されたテーマについて、英語によるディベートやディスカッションを通して、グループ研究を行う。今年度は、教材の選定や授業計画を作成した。

地球市民育成プロジェクト

①ESD 尾瀬学習（1 学年 70 時間）

尾瀬国立公園を題材に、ガイドを伴った現地での学習や新聞作りを行ったり、尾瀬ガイドや連携大学の教授等の指導助言を受けたりして、個人研究を行った。



②群馬探究（2 学年 70 時間）

興味・関心に基づく研究対象や研究分野について、群馬県に関する講義や書籍、マッピングぐんま（webGIS）、官公庁のHP等からの地図データ（主題図等）や統計資料を活用して理解を深め、生徒同士で意見を交換したり、連携大学等からの指導助言を受けたりして、個人研究を行った。

③日本探究（3 学年 70 時間）

興味・関心に基づく研究対象や研究分野について、日本に関する講義や書籍、統計資料（統計局、TDB等）等を活用して理解を深め、生徒同士で意見を交換したり、連携大学等から指導助言を受けたりして、個人研究を行った。また年度末には、東京方面での研究機関訪問（23ヶ所）でも指導助言を受けたり、情報収集したりして、次年度の研究につなげる学習を行った。



研究機関訪問

④世界探究（4 学年 1 単位）

興味・関心に基づく研究対象や研究分野について、全世界に視野を広げながら、書籍や論文、新聞検索等を活用して理解を深め、生徒同士で意見を交換したり、連携大学等から指導助言を受けたりして、個人研究を行った。

⑤世界へ発信（5 学年 1 単位）

これまでの研究成果を論文コンテストに応募したり、英語でまとめてwebに公開したりして、全国や世界に発信した。

SG（スーパーグローバル）学校行事

体験・発表の機会を増やすために、グローバルウィーク（中間発表会など）を昨年度から実施した他、SGHとして既存の行事をより効果的に実施する工夫をしている。

①グローバルウィーク 9/14～19

「World Citizen 科」や「地球市民育成プロジェクト」、SGH海外研修（ハワイ）等での課題研究について、外部講師らを招き発表し、議論する場として「課題研究中間発表会」や「SGカフェ」などを実施した。また、クラスのSGH係を中心に、多文化理解を推進するための活動（多言語での挨拶など）を行った。さらに、群馬県SSH等合同成果発表会も、グローバルウィークの一環として位置付け、ステージ発表やポスター発表を通して、他校の生徒と研究交流を行った。

中間発表会は、課題研究の内容（主に研究テーマや研究方法の妥当性）について、連携機関等の講師や、上級生、下級生も交えた議論を行わせることにより、課題研究内容の充実を図った。また、ポスターセッション等では、課題を発見する力やコミュニケーション能力等を向上させることとともに、上級生や下級生の発表を見たり、講師等からの助言を聞いたりすることで、今後の研究活動の目標やイメージを明確にし、研究活動に対するモチベーションを高めた。なお、2日間の実施で、連携大学から延べ26名の講師に指導助言者として協力いただいた他、教育関係者（SGH校、県内中学校・高等学校等）にも公開し、県内外から延べ27名（他に県内高校生97名）の参加を得た。

「World Citizen 科」のグループ研究は、タブレット端末を用いて、指導助言者や他学年の生徒に対して8分間のセッションを、その場で修正を加えつつ4回行った。

「地球市民育成プロジェクト」の個人研究は、K P法（紙芝居プレゼンテーション法）の要領で作成した6枚のスライドの配置を工夫して掲示し、8分間のポスターセッションを4回行った。

いずれもその場での意見交換・指導助言の他に、コメントシートに記入した助言等や自己評価の記録をもとに、スライドを修正し、10月以降のゼミ活動（教員と生徒4人での意見交換）で活用している。

「SG（スーパーグローバル）カフェ」は、5日間連続で、8月にハワイ島で実施した海外研修の報告や大学生の留学報告を昼休みのカフェテリアで行った。



②イングリッシュキャンプ（1・2学年）

県内A L T 20名程度の協力を得て、1泊2日で実施するもので、4人組のスキット（寸劇）やLunch Discussion（多文化理解のための交流や研究に関する質問会）などを実施した。

③修学旅行（3・5学年）

3学年は、京都・奈良への修学旅行を「国際観光文化都市修学旅行」としてグローバルな視点を持たせている。また5学年は、シンガポール等への修学旅行において、課題研究の一環として「海外フィールドワーク」を実施した。

④課題研究発表会

4日間にわたり、連携大学から延べ43名の指導助言者を派遣していただき研究成果を発表した。

1)全員発表会：クラスごとやテーマごとの会場で全員が発表

World Citizen 科 < 12分（発表8分程度）× 32班× 5学年 > 2/9

地球市民育成プロジェクト < 5分（発表4分以内）× 32名× 4クラス× 5学年 > 2/10

2)クラス代表・テーマ代表発表会 2/16

World Citizen 科

< 12分（発表8分程度）× 4～8班 >

地球市民育成プロジェクト

< 5分（発表4分以内）× 4～8名 >

3)全校成果発表会 3/2（公開）

地球市民育成プロジェクト

< 発表4分以内× 1名× 5学年 >

World Citizen 科+海外研修

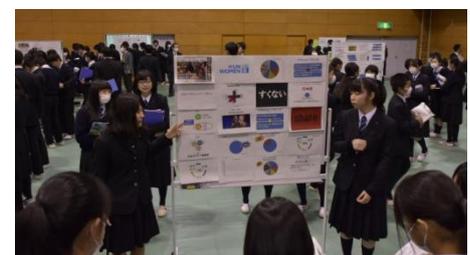
< 発表8分程度× 1班× 5学年+海外研修 >

ポスターセッション（昼休み）

< 2/16 及び 3/12 発表のWC班+海外研修 >

3/2はSGH運営指導委員、県教育委員会事務局の他、学校関係者（SGH校、県内高等学校等）にも公開し、20程度の参加を得た。

また、2/9・10・16の昼休みに、SGカフェ（ミニ講演会・発表会）を実施した。



⑤研究機関訪問（3学年）3/11

「課題研究」で取り組んでいる研究課題に関連する大学・企業等を訪問し、研究成果に対して指導助言をいただくことで、これまでの研究を深めるとともに、将来の進路についての意識を高める契機として実施した。

生徒は事前に電子メールで個別に依頼し、日程等の調整がついた23ヶ所をグループに分かれて訪問した。

⑥グローバル企業訪問（4 学年） 3/18

群馬県のグローバル企業を訪問し、年度当初の授業で来校していただいた各講師 4 名を含む 6 ヶ所を 2 コースに分かれて、課題研究の研究成果を提案として発表し、指導助言を受けることで、課題研究の内容を充実させた。

また、訪問企業等のグローバルな取組について理解を深めるとともに、今後（次年度以降含む）の研究活動の目標やイメージを明確にし、研究活動に対するモチベーションを高めた。

⑦その他

オープンスクールにおいて、MC I など学年中間発表会を実施し、小学生やその保護者、地域住民等に対して課題研究の授業を公開した。

また、芸術鑑賞教室等では、日本の伝統文化体験として定義し、既存の学校行事を SGH の目指す生徒像の実現に寄与するように工夫している。

明石プロジェクト、研究交流

課題発見・解決能力や高度な英語運用能力を育成することを目的に、海外研修と SGゼミ（スーパーグローバルゼミ）を課外活動として実施した。

海外研修は、3月のボストン市やニューヨーク市での2週間程度の研修の一部や、8月のハワイでの1週間程度の研修でフィールドワークを行ったり、現地の高校生との交流・研究内容の発表を行ったりした。

SGゼミは、主に英語ディベート大会や海外研修（ハワイ）に関連する活動を中心に行った。校内では、主に毎週火曜日と木曜日の昼休みの活動に 30 名を超える生徒が参加した。

研究交流の中心は、9月と3月に実施している課題研究の校内発表会（公開）と群馬県SSH等合同成果発表会である。合計で約 2000 名の高校生に研究成果等を発表することができ、また、ポスターセッションの実施により質疑応答も充実したものとなった。



全国高校生英語ディベート大会



研究交流（ハワイ）

成果と課題

SGHの指定により、発表の機会を増やし、外部機関等との連携を充実させることで、課題研究に対する指導助言の機会が飛躍的に増えた。9月の中間発表会において「研究テーマ・方法の妥当性」について指導助言を受けることで、単なる調べ学習ではなく、研究としての方向性を修正することができた。年度末の発表会では、次年度に向けての課題を明確にしたり、研究のヒントを得たりするなど、研究へのモチベーションを高めることができた。

現在の主な課題は、週1時間で実施している World Citizen 科のグループ研究の質を高めることである。総合的な学習の時間や各教科での指導内容を関連付けるなど、前期課程で高めてきた探究学習や協同学習の成果を活かす工夫をしていきたい。